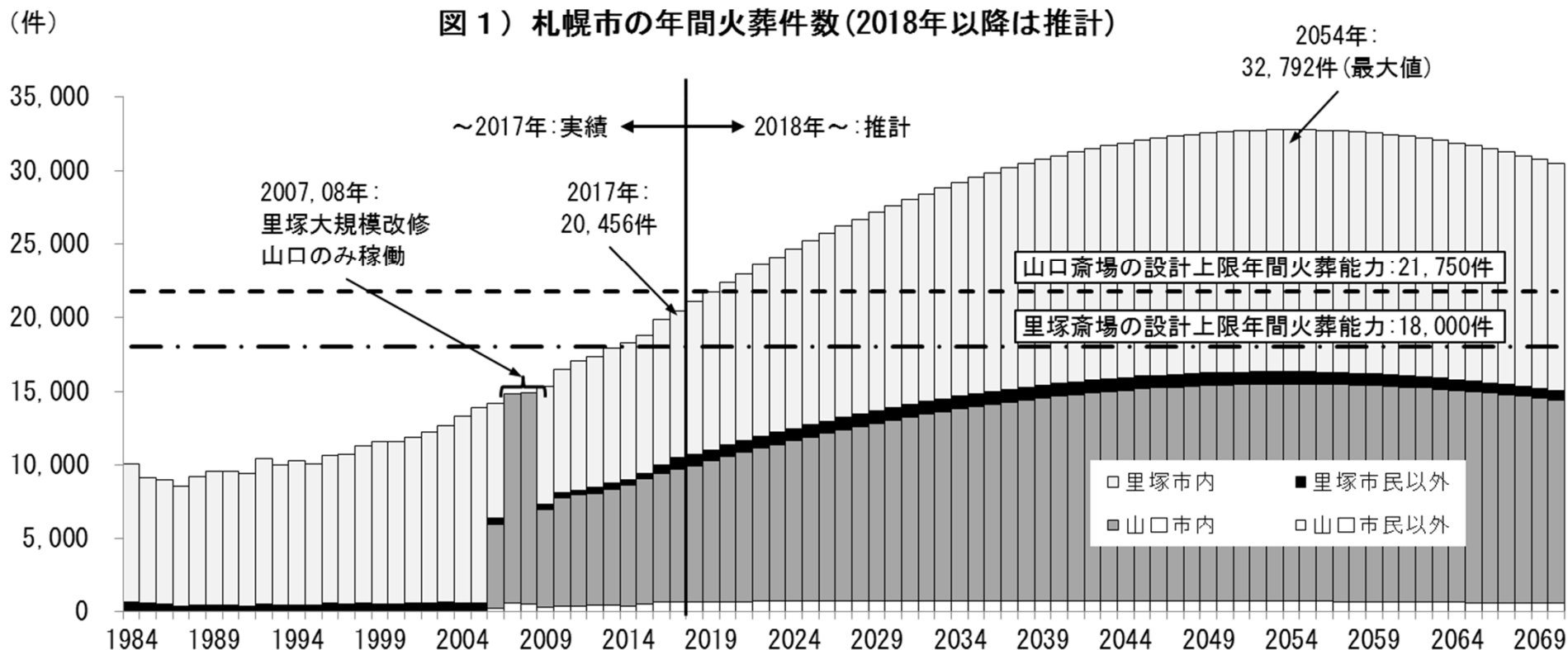


1) 年間火葬件数の推計 (現体制を維持した場合のシミュレーション)

※将来の火葬件数の推計方法

- 自然、社会増減を考慮した札幌市・近郊市町村の死亡者数と各斎場の火葬実績から (H27年国勢調査、国立社会保障・人口問題研究所のH25年3月推計値を使用)



※設計上限年間火葬能力は「稼働日数300日×里塚:30炉・山口:29炉×里塚2回転・山口2.5回転」で算出

	里塚斎場	山口斎場
供用開始	• 1984年 (2007-08年に大規模改修)	• 2006年 (2025年度末でPFI契約満了)
建物の状況	• 雨漏りや外壁の浮き等が発生している (老朽化の進行)	• 特段の問題なし
火葬需要への対応力	• 会葬者の動線が交差して混雑に繋がる • 収骨室が不足している (火葬炉30炉に対し8室)	• 会葬者の動線は分離、交差無し • 収骨室多め (火葬炉29炉に対し14室)
災害時の対応力	• 停電時の非常電源の稼働可能時間が短い (胆振東部地震の停電時は2日弱で稼働限界)	• 停電時も非常電源で長時間稼働が可能

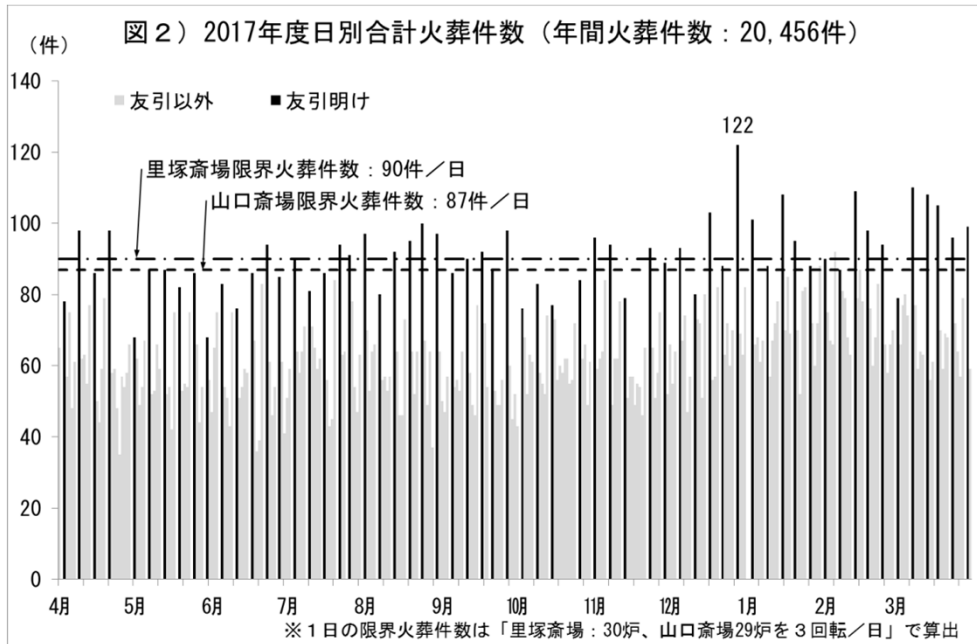
里塚斎場は多数の問題あり

里塚斎場の問題点を踏まえて設計

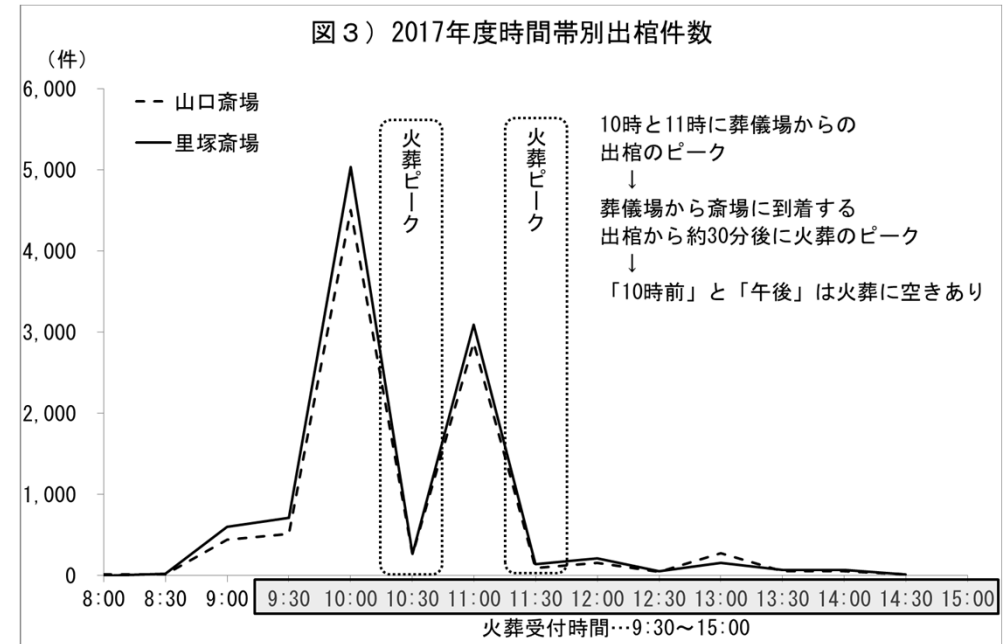
2020年には火葬件数が山口斎場の設計上限火葬数を超過するため、万が一、里塚斎場が故障や改修により長期休止して山口斎場のみになると、対応が非常に困難となる。

火葬体制の維持に向けた
施設運用・整備方法の検討が必要

2) 日別合計火葬件数(実績)



3) 時間帯別出棺件数(実績)



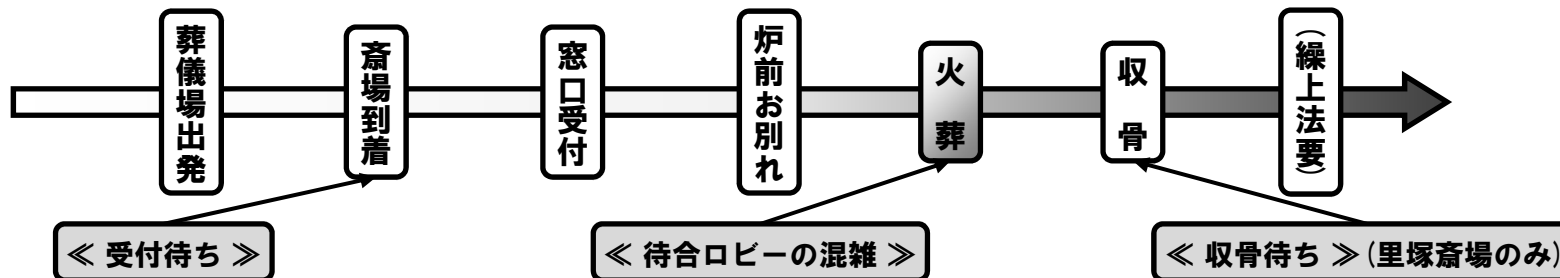
⇒ **友引明けの集中**

- 休場日としている友引の翌日に火葬件数のピークが現れる。(冬期間の友引明けが1年で最多)
- 1施設で対応する場合、4回転が必要である。

⇒ **午前中の集中**

- 北海道では午前中に告別式と火葬を行うのが一般的で、火葬件数のピークは葬儀場から出棺した約30分後の10:30、11:30頃となる。

4) 火葬の流れにおける現在の問題点



• 火葬受付が到着順※のため、斎場への到着が集中するとバスの中で待機する等受付まで待たなければならない。

• 各斎場には火葬炉と同数以上の控室があるが、利用率が約60%と低く、火葬中の待ち時間をロビーで過ごす人が多く混雑する。

• 火葬炉30炉に対して収骨室が8室しかないため、混雑時は火葬が終了しても収骨を開始できない。

※各葬祭業者から火葬の前日にFAXで予定が送られてくるが、何時にどのくらいの来場があるかを把握できるのみで、斎場側から時間変更などはできない。



今後火葬件数の増加に伴いより深刻化するため対策が必要